

2011年4月1日

平成23年度の始めにあたってのご挨拶

(公財) 埼玉県芸術文化振興財団
理事長 竹内 文則

はじめに

平成23年度の始まりに当たり一言ご挨拶申し上げます。3月11日に起こった未曾有の東日本大震災において犠牲になられた方々とそのご遺族に対し、心からのお悔やみと哀悼の意を表しますと共に、被災された方々にも衷心からお見舞い申し上げます。また多大の困難の中、逸早く復興に立ち上がられている皆様には心から敬意を表します。我々財団役員一同、新年度に入って通常業務に邁進するのみならず復興日本に向けてその一助となるべく全力を注ぐ決意を新たにしました次第です。

さて当財団は、平成6年「芸術性の高い優れた舞台芸術等の鑑賞機会を提供すると共に、県民の芸術・文化活動を積極的に支援することで720万県民の豊かな生活に資する」という使命を達成すべく設立されました。現在、彩の国さいたま芸術劇場(さいたま市中央区)、埼玉会館(さいたま市浦和区)、熊谷会館(熊谷市)の3館の指定管理者となり芸術文化振興の役割を担っております。

草創期の10年は、県の財政資金に支えられる中、音楽、演劇、舞踊等各分野で世界最高水準のアーティスト、芸術作品を内外から招請した結果、日本有数の「芸術文化の殿堂」という高い評価を頂きました。しかしながら21世紀に入って、①県財政が逼迫して財政資金が減少する中、財団の採算性が厳しく問われるようになった、②指定管理者制度への移行が決定し、経営面で民間業者と同条件で競争しなければならない状況になる一方、「徹底した説明責任」が要求される時代になった、③地域主権体制へシステム変化が起こり、地域に根ざし、密着した経営が求められた、こと等から財団の在り方が厳しく問われることになりました。

財団改革3つの方向性

こうした状況に対処すべく、平成16年度以降、「公共劇場の使命を明確化すると共に、芸術性、採算性、地域社会性を同時達成する」財団改革に着手しました。

第1は、企画制作部門に、世界的演出家蜷川幸雄氏を芸術監督に招請することで「高い芸術性の創造」に万全の体制を敷くことが出来ました。具体的には、当代一の演出家の厳しい要求に即応できる事業・舞台技術・劇場スタッフ全員の機能強化が格段に図られたのですが、何より嬉しいのは全員にプロ意識改革が徹底され、劇場にとってソフトを創り上げるため最強の基礎競争力が確立出来ました。

第2は、真の経営体としてのマネジメント改革です。以前は、ややもすると与えられた県予算を消化する運営体的体質でしたが、直近は民間企業に負けない組織・営業体制を持

ち「マネジメントする真の経営体」に変わっています。今では財団内では「運営」という言葉は死語になる一方、職員全員が営業販売員でかつ顧客サービスを徹底する経営体制が確立しています。

第3は、地域に根ざし、地域から発信する劇場への改革です。埼玉から日本のみならず世界に向けて発信を行う芸術文化の拠点になると共に、人々が数多く集まり地域のにぎわいを創出する核としての役割を果たす体制づくりを進めました。特に、蜷川芸術監督が常駐しているという効果は抜群で、蜷川監督自身のトーク企画、稽古場見学会実施も相俟って、劇場周辺の賑わいは以前と比べものにならないほどの活況を呈しています。

「歴史に残る1年」となった平成22年度

7年間の施策によって、業績は大幅に改善され「高い芸術性と採算性の両立」が可能になりました。加えて、財団が新たな時代ニーズを先取りしてオルガナイズ機能を発揮することで、公共劇場に最も求められる使命を達成できつつあると確信しております。こうした中、平成22年度は、以下3点で正に歴史に残る1年となりました。

第1は、蜷川監督が演出家として日本で初めて文化勲章を受章したことです。長年にわたる演出家活動における世界的、全国的な芸術文化の向上に対する多大な業績が認められたことに加え、蜷川監督自身が立ち上げた、地域に根ざし世界でも類例を見ない2つの演劇集団を育成したことが高く評価されたのです。一つは、「さいたまゴールドシアター（平成18年度発足 55歳以上の熟年演劇集団 現在42名 平均年齢72歳 最高齢85歳）」ですが、「自分史を体現する」新たな演劇領域を発掘すると共に、成熟社会において最優先される「自己実現」ニーズに応える嚆矢として世間が注目したので、社会現象化まで起こったのは周知のとおりです。今一つが「さいたまネクストシアター（平成20年度発足 才能と魅力、意欲あふれる若手俳優集団 現在20名 平均年齢26歳）」で、高い芸術性を持った作品の制作・創造過程を経験させることにより、舞台芸術の未来を担う人材育成を図ることを目的に結成し、第2回今年度公演「美しきものの伝説」では、読売演劇大賞演劇部門優秀作品（5作品の一つ）に選出されたのです。

第2は、百年ぶりの制度改革が進む中で、私ども財団が今年度より公益法人へ組織転換したことです。平成22年度においてその転換への準備を万全に行った結果、公共施設としての役割をより明確化し、その使命に沿った特徴ある業務活動を展開する新たな組織体制が整いました。

第3は、彩の国さいたま芸術劇場が発足17年目にして初めて大改修工事に入ったことです。安心・安全を確保するための万全の措置を講じるのは勿論の事、舞台をより輝かせる照明・音響等の技術革新を行う一方、あらゆる顧客層の方々に心地よい鑑賞環境を整える改修を目指しております。約半年間休館でご迷惑をお掛けいたしますが、新年度8月のリニューアルオープンを心待ちにして頂ければ幸いです。

3館の特徴を生かした魅力あふれる公演と新たな試み

創立17年目の今年は、既に述べたとおり彩の国さいたま芸術劇場がリニューアルオープン、公益財団法人に組織改編する等私共財団にとっては「第2のスタート」というべき年です。演劇部門では、リニューアルオープン後、彩の国シェイクスピアシリーズ第24弾「アントニーとクレオパトラ」を吉田鋼太郎さん、安蘭けいさん主演で上演致します。また「さいたまゴールド・シアター」は、初回公演以来となる岩松了さんによる新作書き下ろし作品を第5回公演として、「さいたまネクスト・シアター」は、新たなメンバーを加えてさらなる飛躍を目指す第3回公演を予定しています。

一方、小粒ですが素晴らしい音質を持つ音楽ホールでの音楽公演は、昨年引き続き新進気鋭のピアニスト小菅優さん、世界の OZONE こと小曾根真さんによる当劇場でしか味わうことが出来ない企画をご用意致しております。また堤剛さん、小山実稚恵さんを始めとした当劇場ゆかりのトップアーティストをお迎えして特別企画「バッハとの対話」シリーズを開催します。更に舞踊部門では、ジェローム・ベル「ザ・ショー・マスト・ゴー・オン」、ヤン・ファールブル「プロメテウスの風景Ⅱ」等世界的振り付け・演出家、アーティストをお迎えして正に「現代舞踊の殿堂」と評されるに相応しい公演を予定しております。また無料開放スペースで実施するオルガンコンサートや、劇場の機構・創りを楽しみながら学ぶ劇場体験ツアーなど、舞台芸術に馴染みのない方でも気軽に楽しめるプログラムを準備する一方、小中学生が芸術・文化に触れ合う機会を創るためのアーティストが学校等に赴くアウトリーチ活動も積極的に行ってゆきます。

埼玉会館・熊谷会館においては、複合館としてそれぞれの特長を生かし大衆性をより意識して、新日本フィルハーモニー、NHK交響楽団等のオーケストラ公演などの音楽や伝統芸能、ワークショップを含めたダンス公演中心に企画制作を行い、地域ニーズに応える公演を多数用意しております。更に近時埼玉会館では、地元浦和の商店街等地域住民との親密度を深めて地域の賑わいを演出するランチタイムコンサート公演を企画、熊谷会館では地域の中学、高校等教育機関との連携を深める等、地域活性化の核として財団の新しい役割を果たし始めています。

新たな課題に向けて更なる改革

このように財団改革は進みましたが、現状ではその土台が出来たに過ぎない段階です。目指すべき最終目標に向かって以下3つの課題があります。

第1は、「真に創造する劇場」への脱皮です。蜷川監督の下、自ら作り出し日本・世界に発信する体制が出来つつあることは確かですが、地方公演も含めて大きな興行を独力で企画制作して取り仕切る総合プロデュース力の涵養が不可欠です。「ガラスの仮面」制作でその第一歩は踏み出しましたが、未だそのノウハウ蓄積が不足しています。更なる大型公演のみならず世界が評価する創造性あふれる企画を提供することで真のプロデュース機能獲得を目指して行きます。

第2は、中長期的に財団経営体制を盤石なものに確立することです。21世紀初頭の今、「新しい公」の役割を認識した上で官の使命を全うしつつ、民間と同条件で勝負するため効率性追求、マネジメント改革を行う財団経営は、指定管理者制度が定着した現在、最も実効を上げられる体制です。日本の芸術文化業界にそれを示すためにも我々の財団経営を更にしっかりしたものにしてゆかねばなりません。

第3は、財団の新たな使命として「さいたまのアイデンティティ確立を担う」ことで二つあります。一つは、芸術文化業界の中で「さいたまの存在感」を更に浸透させることで、それには全国各地域の劇場と公演、ワークショップ、アートマネジメント、舞台技術ノウハウ等連携・提携を深めて日本の芸術文化業界を牽引してゆくことです。今一つは、「地域づくりの核」としての役割に徹すること。これからは財団だけが業績を上げてそれが地域全体の活性化につながらなければ、我々の使命は達成されません。「さいたまにおける芸術文化立県」へのビジョンを実現する役割を財団が求められており、その実現に向けて注力してゆきます。

おわりに

財団は今、3つの意味で重要な節目に立っています。第1は、我々を取り巻く芸術文化環境が以下二点で大きく変わることです。一つは、公益財団法人に組織転換して新たな一歩を歩み始めました。民間の文化施設では決して出来ない公共的役割を改めて肝に銘じ、その使命をしっかり果たせるよう更なる経営改革に万全を期す所存です。今一つは、国の芸術文化政策において「劇場法」（仮称）が制定される見通しが高まっています。それは芸術文化分野の政策効果をより高めるために、自ら創造する拠点劇場により厳しい使命を与える政策が打ち出されるようです。私共としては、今こそ培ってきた専門性をベースに芸術文化を高めるプロジェクト企画を立案すると共に、他劇場と機能的なアライアンスを組む等そのソフトパワーを十分発揮して国家施策に応える体制づくりを進めてゆきます。

第2は、今年度で平成21年度から受託した指定管理者期間が満了致します。そうした中、県の素晴らしい財産である劇場価値を永続させるために彩の国さいたま芸術劇場の改修工事に入っています。私共財団は、改修後も素晴らしいハードに魂を吹き込む芸術性高いソフト提供、使命に応える財団経営を目指して更なる経営改革を進めて参ります。それによって県民の皆様の高い芸術文化に触れ合う機会を提供すると共に、芸術文化活動を支援する様々な活動を行ってゆきます。この間の指定管理者としての評価については、県、第三者に委ねることになりますが、我々としては引き続き更なる芸術文化振興の役割を担える指定管理者として万全の体制を整えてゆく所存です。

第3は未曾有の大震災に見舞われた日本、復興に向けて我々財団も一丸となってその一助を果たす使命があることです。原発事故の動向も定まらず、大震災直後の被災救援が最優先される状況が続く中では、緊急時公共施設として財団施設提供の準備は進めております。一方、「被災から復興へ」これから長く厳しい道のりが待ち受けている日本全体の状況

下では、人々の心を豊かにし明日の活力をもたらす芸術文化の提供に全力傾注すること、それこそが財団本来の使命であり、復興日本の一助になると確信しております。

昨年度3館合計で110万人のご来館を賜りました。未曾有の大震災という厳しい状況下ではありますが、今年度も多くの県民並びに全国の皆様にご来場賜り、素晴らしい芸術・文化をご堪能頂くと共に、地域、日本の活性化に貢献が出来ればと願っております。我々は、これからも「さいたまのみならず日本の財産」と呼ばれる劇場を目指して全員一丸となって努めて参ります、なにとぞご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

以 上